

河内美舟 著

ビエット君

ベトナム難民児の成長記録



河内美舟 著

ビエット君

ベトナム難民児の成長記録



《著者紹介》

河内美舟（こうち・みふね）

1942（昭和17）年12月山口県大津郡日置町生まれ。
豊岡女子短大卒業。仏教大学養護学校課程修了。田
代保育所設立ののち、保母生活19年。明蓮寺坊守、
里親生活8年。自閉児、情緒不安定児、ベトナム難
民児を実子とともに養育。

著書『七人の子どもと』（条例出版，1983年）。

【愛いっぱい】（ミネルヴァ書房，1985年）

【ただ今，8人】（福武書店，1987年）

ビエット君

1988年5月30日 初版第1刷発行

検印廃止

定価はカバーに
表示しています

著 者 河 内 美 舟

発 行 者 杉 田 信 夫

印 刷 者 坂 本 嘉 廣

発 行 所 株式会社 ミネルヴァ書房

京都市山科区日ノ岡堤谷町 1
電 話 (075) 581-5191 番
振 替 京 都 2-8076 番

©河内美舟，1988

内外印刷・新生製本

Printed in Japan
ISBN4-623-01829-6

ビ
エ
ッ
ト
君

目
次

ブローグ	1
新たなる出逢い	
挨拶はただ笑顔	8
ぶっつけ本番、珍会話	12
ピエット一緒にキアル	19
好奇心と自己主張	
電車と新幹線	24
マラリアと友情	32
ボーン——淋しさと望郷	
ボーン	38
買ウイイデス	45
風習と食生活	50
犬と猫	59
何デモ自由、大好き	62

友達欲シイアルヨ

コニチワノ……………72

小サイ子イシヨ勉強ナ―イ……………76

東へ西へ――家出、家出……………78

僕、小学生……………85

ココマセンノ……………93

手紙、手紙ノ……………103

血見マス、僕決メタノ……………105

家族の一員として

オーストラリアのおじさん……………112

地域活動に自主参加……………116

風習と家風……………120

涙・涙・涙の許しあい……………123

日々新たにアラカルト……………130

学習の場

漢字覚エ無理アルヨ……………138

オ母サン、コレ何ダ……………145

先生教エ下サイ……………149

言葉ア・ラ・カ・ル・ト……………153

僕は、こう思うんだ！

家庭のあり方……………158

都会に出て……………166

思いやり……………173

僕の将来？……………177

勇 気

子離れの母の勇氣……………186

狙撃と襲撃……………191

ビドン島の日々……………196

世界ドコ行キ同ジ……………200

挫折から思い直しへ

思いどおりに壁……………206

見守ってくれる人たち……………217

難民の人たちとの出逢い……………223

勉強ダメ、クラブダメ、体ダメ……………230

前向きに！

奨学生採用と外人登録……………242

僕、オ願イアリマス……………248

後輩・ティエン……………254

“里子”の言葉の響き……………262

僕ノ国案内スルヨ……………266

エピソード……………271

あとがき

ブローグ

ベトナム難民児、ドウ・ホン・ビエット（日本名＝河内義昭）が、山口県美祢市の山寺、浄土真宗明蓮寺に住む、私たち夫婦の里子となって、早くも七年の歳月が過ぎた。

もうすぐ彼は、私の手もとから巣立ち、社会の荒波へと、航海の汽笛を鳴らそうとしている。こうしたいま、これまでの一日一日を回想する。彼との出逢いから今日までを……。

一九八〇年（昭和五十五）、晩秋の冷たい風が吹くころ。

私たち夫婦のもとへ日本国際社会事業団から、ひとりのやせ細った神経質そうな少年の写真と身上書が届いた。父は戦死と記入してある。私はもちろん、主人や五人の子どもたちも彼に心動かされた。生死を争うボートピープルとして海洋を漂った彼を、一日千秋の思いで待った。

一九八一年（昭和五十六）二月三日、午後四時。

「河内さん、明日ビエットがきますよ。迎えてくれますか」

私は、事業団からの電話にどう返事をしたか覚えていない。はやる心を制しきれず、上阪する。翌、二月四日。ビエットが大阪空港に降りたった。

「ビエットノ」

「オ、カ、ア、サ、ン」

何年も前から知りあっていたように、何ともいえない親しみとなつかしさが交錯するのをどうすることもできなかった。ビエットは、ただたどしい日本語で、私を「オカアサン」と呼んでくれた。その声の響きに国境は感じられず、むしろ暖かい血の通いあうのを覚えた。

ビエットは、この日から私たち家族の一員となった。彼には、ベトナムに母と別居している姉（里姉）がひとりいたが、年齢が離れすぎていたこともあって、ひとりっ子同然に育った。

そんなビエットに五人の兄弟が一度にできて、彼の身边は、急に騒々しくなった。そして、ビエットの兄弟として起居とともにする子どもたちも、彼を迎えていろいろな反応を示した。そんなわが家は、毎日変化に富んだ生活を余儀なくさせられることとなった。

ビエットをとりまく子どもたち（異兄弟）はいま、実子が三人、里子が五人（ビエットと就職した子どもを含めて）、あわせて八人である。

ビエットのよき理解者であり、相談にも応じてくれる長男、真史（二十四歳）。

ビエットをさりげなく気づかい、見守ってくれる長女、総子（二十歳）。

大学生の次男、宏（十八歳）。彼は、ビエットと同学齢のためか当初は私やビエットにたいして

反感を持ったりして心がたえずゆれうごいていたが、いまでは私の知らないところでビエットと通じあう仲になっている。

そしていまは法律上の里親・里子の関係はなくなつたが、理容師の卵の恵子（十七歳）。

去年の春やってきたベトナム難民児、グエン・バン・ティエン（十四歳）。中学一年生の彼は、ビエットを兄のように慕う反面、ちょっぴり対抗意識を持っている。

同じく中学一年生の、二歳八カ月でわが家にやってきた敬太（十二歳）。そんな彼は、先住権をふりかざし、ほかの子どもたちの感情を損ねることも。ビエットにたいしては本質がわかつてくると、対応も一変して一目置くようになった。

最後に、ビエットがなぜかジェラシーを感じている元気でスポーツ万能の保夫（十歳）。彼は、ビエットの自信あふれる態度にあこがれている。

こうした数多い子どもたちのなかで、ビエットが心を開き、ホンネをわかちあうには、ずいぶん長い月日を要した。

風習や生活のちがいが、言葉のちがいが、互いの意思の疎通がむずかしかったころ、ビエットの表情は固く、暗い陰がチラつく日が続いた。彼の心は、どこに行っても満たされないうえ、いろんなことを試み、それが家出となつてあらわれることもあった。そのたびに、私たち夫婦は、悩み、考えあぐねた。ビエットの行動は、ありあまる好奇心の発露ともいえるものだった。彼が

いろいろな言動に及ぶのは、私たちを親として認めようとするワンステップのひとつなのかもしれない。なかった。

しかし、こうしたくり返しを経て、ようやく、お互いを理解しあえるようになった。

彼は、日本の生活にとけこみ、周囲から認められ、わが国はじめての難民福祉認定里子第一号となった。そして、家族の一員としての責任すら感じるようになったのである。ビエットの好奇心は、いまのところ小休止である。

母国にいる母親とも音信可能な昨今、彼は、生活習慣や学力の向上に専一するようになり、平凡な日々のなかにも、幸福を見いだそうとしている。

「僕、オ母サン、マジメヤリ、勉強ヤリイマス。オ母サン、国一人生活スルヨ。僕、日本就職シ、ガンバルヨ。オ母サン安心スル、仕事楽シアルヨ」

数年前、民放の「ゆく年くる年」で母親とテレビを通して対面した。多くの人々の支援と協力で、彼は、母国の母親スン・マイさんに、自分の成長した姿を見せることができた。

「オ母サン。元気アリマスカ、僕……オ母サン会イタイノ」

短い会話に、海をはさんだへだたりはない。

「日本ノオ父サン、オ母サン。アリガトウゴザイマス。ビエットノコト、オ願イシマス」

もの静かなスン・マイさんの目にはかすかに涙が光り、ひざに置かれた両手にいいしれない悲しみと愛が見えた。ビエットは、海山のへだてない母親の深い心を改めて思い知らされた。

「オ母サン、国^{コク}出^デタ、ワカタタヨ。僕、イバイワガママアタヨ（国を出てみてわかったよ。僕がわがままだったことが）」

ビエットは、これを機に、心の広がりを見せる。

“ビエット！ オ母サンを越え、私たちを越えて大きく羽ばたくのよ”

新たな出逢い



挨拶はただ笑顔

一九八一年（昭和五十六）二月四日。

ドウ・ホン・ピエット（当時十二歳）は、日本の地に降りた。灰色の空より雪が舞い散る大阪空港は、ことのほか風が冷たい。頭髮を風にばらつかせ、白いショルダーバッグをひとつ肩にかけ、一歩一歩確かめるように四人のベトナム難民児（ユン、テン、トン、ピエット）がタラップを降りてきた。

彼らは、未知の世界への不安と、今後の生活にたいする期待を交錯させたまなざしで、あたりを見まわしながらロビーへと向かう。

彼らは、冷たい空の風のなか、白いショルダーバッグを大事に片手でおさえ（中には必要なことを記したメモが数枚入っているだけであった）、ゴムぞうりをはく真黒い素足は震えている。シャツ一枚にジーパンスタイルの彼らは、寒さで唇も震えるほどであったが、出迎えの人たちに微かな笑みをつくって見せてくれた。

彼らは、わが国最初の外務省許可受け入れ難民里子である（当日、同時に成田空港に降りた四人のベトナム難民児は、関東以北地方へ）。

取材のため待機していたマスコミのカメラのフラッシュが、彼らに容赦なく光をあびせる。そのたびに、とまどいを見せる彼らは、人垣をかきわけながら、日本国際社会事業団のケースワーカー岩城女史に誘導される。柵の反対側には、四人の受け入れ予定の里親たちが、マスコミの人たちの肩越しに見え隠れする。

私は、岩城女史の肩越しにビエットを見つけた。彼を見て、はじめて会うのに、そう思えなかった。なぜなら、彼の身上書と写真を、ことあるごとにバッグから出してはながめ、彼のそれを暗唱できるほどになっていたから……。

「ビエット、日本のお母さんですよ」

「……」

「ビエット！」

「オ、カ、ア、サ、ン」

ビエットはうなずくように、私と敬太をじっと見つめた。

海と空を経て、はるばるやってきた彼は、正視できないくらいにやせすぎている。しかし華奢で神経質そうだが、瞳に輝きがあった。

彼は、機内で特訓を受けたのか、つけ焼き刃のようできこちない、